

手漉き和紙の作製における熟練職人の技の解明

Analysis of skill of expert on manufacturing large “Echizen Washi”
Japanese traditional paper

後藤 彰彦（GOTO Akihiko）

本研究では、手漉き和紙の一つである越前和紙に着目した。越前和紙の歴史は古く、越前和紙の発祥の地といわれる五箇地区には製紙の始まりが神話として残っている。その内容から、五箇地区に製紙が伝わったのは西暦 480 年～500 年頃と考えられている。製紙が伝えられた当初の技術は、次第に改良されて南北朝時代にその品質の高さから特に「出世奉書」と命名された。その後、織田信長、豊臣秀吉などから特権を与えられ、徳川時代において、越前和紙は将軍家御用奉書として幕末まで保護発展することとなる。寛文元年（1661 年）福井藩は初めての藩札を発行した。藩札に用いられる紙は「お留め紙」として一般に漉くことは許されず、厳重に取り締まれる。明治新政府による太政官札の発行にあたり、今まで発行された藩札を集め研究協議した結果、越前五箇村の紙が最高とされた。五箇村は藩札発行の経験が豊かであることなどから金札用の紙を漉くことが決まる。1500 年前より、越前和紙の職人は、たゆまぬ努力と新しい技術への探究心を持ち、高い要求に対して、高い技術力で応えてきた。越前和紙は、現在においても紙幣や証券として印刷適正と耐久性は世界一といわれる。また、日本の手漉き和紙の中で、最も大きな和紙を作れるのは越前和紙といわれ、その作業は、大きな漉舟と簀桁を用いて、流し漉きと溜め漉きと呼ばれる作業で行われる。この大判の和紙漉きの作業は 2 名あるいは 4 名の職人が協力し合いながら遂行される。熟練した職人が作業の始まりから製品の仕上がり度合いを判断して終了までを指示する。そこで、大判越前和紙の作製工程の分析および熟練職人の技の解明に取り組んだ^(1,2)。さらに、和紙の仕上がり度合いの評価において、「地合い」という言葉がある。仕上がり度合いの良い紙は、「地合いが良い」と表現される。越前和紙の職人は、地合いをどのように見極めて判断しているのかについても検討を行なった⁽³⁾。

職人の技の測定実験は、越前市岩本町において、創業大正 8 年より約 100 年営まれている(株)五十嵐製紙にご協力をいただいた。実験協力者は、2 名の伝統工芸士を中心とした。両者の経験年数は、23 年と 46 年である。対象とした手漉き和紙は、大判越前和紙であり、2 名で作業を行なう。被験者の動作測定は、光学式モーションキャプチャシステム MAC 3D SYSTEM を用いて行なった。その結果、両者の汲み上げおよび簀流し作業は、ほぼ同様であることがわかった。しかしながら、漉き作業における桁の動かし方に違いがあることを明らかとした。

(1)中川、川森、五十嵐、山田、須田、後藤、山代、幾久、他、「大判の越前和紙づくりに関する研究」、日本材料学会 第 4 回材料シンポジウム、916（2018）。

- (2)川森、中川、須田、後藤、山代、杉山、「大判越前和紙のものづくりにおける動作解析」、日本機械学会 第 26 回機械材料・材料加工技術講演会、807 (2018).
- (3)中川、川森、須田、後藤、山代、杉山、「大判越前和紙の地合いの評価について」、日本機械学会 第 26 回機械材料・材料加工技術講演会、808 (2018).